

京都市交響楽団ビジョン（仮称）

～キャッチフレーズ～

【ビジョンの位置付け】

今日、音楽は、日々の暮らしの中に溢れ、私たちの生活の一部となっています。
 京都市民は、伝統的な日本文化を大切にしながら、「優れた文化を創造し続ける永久に新しい文化都市」であろうと、1956年、西洋のオーケストラを「新たな文化財」として構想し、日本初の自治体オーケストラを設立しました。
 設立から半世紀超、多くの市民に支えられながら、日々演奏力に磨きをかけ、最良の音楽を届けることに邁進し、文化的な市民生活に寄与するとともに、日本屈指のオーケストラとして評価されるまでに、成長・発展を続けてきました。
 今後も、京都市交響楽団は、これまで培ってきたものを継承しながら、新たな時代を見据えて果たすべき役割を自覚し、文化芸術都市・京都のシンボルとしての更なる発展を目指し、進み続けなければなりません。
 令和2年4月。京都市交響楽団が新たなステージを迎える今、改めて、京都市交響楽団の主体である楽団員や運営財団、京都市が、オーケストラの意義、市民にとっての価値等を自問し、未来に向かう方向性を共有し、市民の皆様にお示しする「京都市交響楽団ビジョン」を構想しました。

【基本理念】

悠久の時を刻む京都に、今ここでしか出会えない最上の瞬く音を奏で、
 人々と共に響きあう。そして、音楽の力であらゆる文化をつなぎ、「永久に新しい文化都市」の新たな価値を創造し、次代の文化を育み続ける。

【京響の目指す姿】

- 「音楽の力で市民・社会と共に響きあう」楽団
- 「“永久に新しい文化都市”の新たな価値創造のハブとなる」楽団
- 「楽団員が持つ高い演奏力・個性・創造性が調和する」楽団

【理念・目指す姿】のキーワード

○委員意見 ●楽団員意見 △資料抜粋

<必要性・政策的意義>

- 周辺都市や様々な文化活動との交流のハブ、音楽文化を流していく泉のような存在
- 西洋音楽は、「教育」「娯楽」「教養」の一つとして、日本人の生活の一部をなすものになった。西洋音楽的旋律、リズム、和声による音楽は街中に溢れ、老若男女問わず享受している。今や多くの人は生まれたときから、西洋音楽を日常のものとして享受している
- 京都市が設置に責任を持つ楽団
- 伝統的な日本文化が根付く中、西洋のオーケストラを創設。西洋の文化も大切に土地柄
- 市民が応援し、楽団が演奏力を高めることで次世代の文化的発展につなげる
- 国内外から芸術家が集まる都市を目指す上で、京響は都市のシンボルとなるべき
- 京響は京都市の大切な文化芸術財産
- △ 「優れた文化を創造し続ける永久に新しい文化都市」（世界文化自由都市宣言）
- △ 「新たな文化財」（京響設立時の構想。市長挨拶）

<市民にとっての価値>

- 京都は音楽高校、芸術大学を有しており、京響は京都の音楽教育、人づくりをけん引する存在
- 地方のオーケストラは、常に市民第一主義で活動しなければならない。社会的目線をもって日々改革を推し進めなければ、市民からの支援、共感は得られない。そのためには、技術力や音楽性の向上による優れた音楽の提供はもとより、地域性を生かしたブランドの確立、ファン層の拡大、教育プログラムの強化などが必要である
- 京響は市民にとって街の誇り、心の豊かさをはぐくむもの
- 京響が音楽教育の分野で果たす役割は大きい。子どもたちの心づくり等を音楽の力でサポート
- 市民に心や身体で京響の音楽を受け取ってもらい、文化芸術の大切さを感じてもらう
- 最高の芸術を提供し、市民の芸術性を高める。芸術性溢れたまちにすることが使命
- △ 音楽を通じて心の豊かさを育み、時代を捉えた新たな価値を創造し続ける（研究論文）

<楽団としての理想>

- 京響運営の関係者がビジョンを共有し、相互に尊敬と敬意をもって、コミュニケーションを活発に行うことで、創造と調和のある組織となる
- 芸術家としての創造性、音楽家としての演奏レベルの向上を目指し、良い音楽を目指す
- 社会の一員であることを意識し、市民に溶け込み、社会的な理解を得ること
- 敷居は低く、格式高くあるべき
- 世界に誇れるオーケストラとして演奏力の向上を図るとともに市民に寄り添った活動を展開
- 演奏を通して子どもたちの教育や地域社会に積極的に参加する
- 自治体と文化団体と地域の連携による運営の一番の成功モデルを目指す
- 市民にとっての精神的な拠り所となるオーケストラを目指す
- オーケストラ活動や存在に共感、社会的な意義を理解する人が広がって支持される楽団に
- △ 「市民に愛され、世界に誇れるオーケストラ」を目指し続ける（京響条例）

目指す姿を実現するための戦略

戦略1 市民に愛され、世界に誇れるオーケストラの追求

<芸術団体としての高みを目指すために>

① 文化芸術都市・京都を牽引する文化芸術の振興

文化芸術都市・京都を代表する文化資源の一つとして、演奏力の向上による芸術性の追求はもとより、京都市立芸術大学など教育機関との連携による担い手育成にも取り組み、京都が誇る文化芸術の振興を牽引します。

② クラシック音楽・オーケストラの楽しさを実感できるプログラムづくり

クラシックファンからクラシックに馴染みのない方まで、様々な方々が楽しめる多彩なプログラムづくりに取り組み、楽団員とお客様が共に響き合う体験を提供します。

③ 国内外に向けた京響の音楽の発信

京響が世界から招かれるオーケストラになるために、演奏力の向上に加え、国内知名度の向上や外国への情報発信が必須です。今後は、市外での公演や、国内外から京都を訪れる観光客へのPR等により、京響の知名度向上を図ります。

<青少年の育成・地域の文化振興のために>

④ 子どもたちの豊かな心をはぐくむ教育プログラムの積極的な展開

小学生や中学生のための音楽鑑賞教室やジュニアオーケストラの活動をはじめ、子どもたちが音楽を通して豊かな心をはぐくむためのプログラムに積極的に取り組みます。

⑤ より多くの市民に京響の音楽を届ける鑑賞機会の提供

地域に根ざしたオーケストラとして、京都コンサートホールでの演奏会はもとより、市内各所での小編成の演奏会等を開催し、より多くの市民の皆様へ京響の音楽をお届けします。

<クラシックファンの充実・拡大のために>

⑥ 京響ファンに喜ばれるサービスの提供と新たなファンの獲得

京響友の会をはじめ、ファンの皆様へ喜ばれるサービスを常に提供することで、ファンがファンを呼ぶ好循環を生み出し、京響の更なる発展につなげます。また、全国・世界から京都に学びに来る大学生・留学生をはじめ、様々なライフステージで京響の音楽に触れることができる機会を提供します。

⑦ 京響、楽団員を身近に感じる情報発信

多くの方に京響の音楽が届くよう、また、鑑賞されない方も視野に、より多くの市民の皆様へ京響を身近に感じていただけるよう、様々なメディアを活用しながら戦略的な情報発信に取り組みます。

【戦略1】のキーワード

<文化芸術の振興>

- 素晴らしい作品を指揮者と共に作り上げ、最高の芸術を提供することで、市民の芸術性を高める
- 京都市をパリやニューヨークのように、芸術性溢れた町にすることが京響の使命
- 文化庁が京都へ移転し、文化芸術都市・京都を目指す上でなくてはならない存在
- 半世紀に渡って国際都市・京都の文化芸術の象徴の役割を担ってきた
- 心を豊かにし、生活に活力を与え、文化都市として市民が誇れる存在
- △ 「市民文化の形成、青少年の情操の向上、住民の権利の増進」（設立理念）

<プログラム>

- クラシック音楽を軸に
- エンターテインメント性もあるポップスやゲーム音楽との融合
- 画期的な企画を試み、幅広い聴衆の鑑賞意欲や関心を掻き立てるものを発信し続ける
- 最近吹奏楽人口が多くなってきており、京響で吹奏楽プログラムをやってみるのも良い

<国内の知名度向上・世界に向けた情報発信>

- 外での評価が拡散されることで、今まで興味を持ってもらえなかった世代に認知される
- 京響の演奏会を聴いて京都に来たというツーリストを増やしたい
- 日本国内にとどまらず世界に向けて高度なオーケストラ技術を発信するべき
- 国内ツアーや海外演奏会を実施してはどうか
- 京都以外での活動も増やすべき。日本や世界で評価されれば市民も喜んでくれる
- 外国人観光客向けの商品を旅行会社と企画する。京都ならではのおもてなし文化を京響で

<教育的機能>

- 小・中学生の音楽教室は継続・充実するべき
- 教育現場への参画は積極的に行い、ファンの拡大を図りたい
- 堀川音楽高校、市立芸大、ジュニオケ文化資源と連携
- 市内の学校に限定したりハーサル見学の実施
- 音楽教室やみんなのコンサートなど、市民の文化教養育成の一端を担っている

<演奏機会>

- 少しでも多くの市民の目と耳に届く機会を増やす、興味を持ってもらうことが大切
- 身近に音楽を感じられる小さな演奏会、参加型公演、音楽体験、ワークショップができれば
- ホール以外の場所でのオーケストラやアンサンブル等の演奏会を拡充
- 平日の昼間の演奏会など、夜や土日に出かけられない客層へのアプローチを行う
- ディスカバリーの大人版（クラシック音楽入門編）のような演奏会を企画

<広報、メディア戦略>

- SNSの活用
- マスメディアに出ると認知度が向上するのでもっと活用するべき
- ホームページでの楽員紹介（写真とプロフィールなどを掲載）

➡ 資料2 京都市交響楽団における取組の現状と課題（戦略1関係）

目指す姿を実現するための戦略

戦略2 高い演奏力を追求し環境の変化に適応し続ける楽団の実現

<演奏活動に専念できる環境づくり>

⑧ プロの音楽家としての誇りと京響楽団員としての自覚・責任の堅持

プロの芸術家・音楽家として、常にモチベーションを高く持ち、個性の発揮と演奏力の向上に努め、一つ一つの公演を大切にします。また、京響の楽団員として、コンプライアンスの遵守はもとより、市民第一主義の精神で、社会の一員としての視点を大切にす姿勢を重視します。

⑨ 「組織の一員」と「音楽家」を両立する「楽団員のあり方」の追求

楽団員が、組織の一員として、京響の演奏活動を第一に取り組むとともに、一人の音楽家としての活動や後進の育成等の活動についてもバランスを図れる、京響楽団員としてのあり方を追求し続けます。

⑩ 活発なコミュニケーションによる創造性と調和の追求

音楽そのものがコミュニケーションです。楽団員、指揮者、事務局職員が、互いの意見を尊重し、互いに尊敬と敬意をもってコミュニケーションを活発にすることで、楽団員の個性・創造性の調和を大切にす楽団風土をつくります。

<事務局のマネジメント力強化>

⑪ 持続的な収支構造の確立

京都市の財政支援に加え、演奏収入や助成金、寄付金の確保をはじめ多様な資金調達手段を講じます。全体の事業収支のバランスを図りながら、社会の変化にしなやかに対応できるよう、持続的な収支構造を確立します。

⑫ 京響の発展を支える事務局体制の構築

京響の更なる発展に向け、運営財団と京都市が連携し、楽団員の個性を大切にしながら、社会の要請に適応した組織運営を行うことができる事務局体制を構築します。

【戦略の実現に向けて】

京響楽団員、公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団、京都市は、京響が「市民に愛され、世界に誇れるオーケストラ」を目指し、ビジョンに掲げた戦略を実践し、継続できているかを常に共有し、ビジョンの実現に向けて前進してまいります。

【戦略2】のキーワード

<楽団員としての誇り（演奏力と意識）>

- 楽団員一人ひとりが社会の中で生きていることを認識し、社会的に許容される範囲で行動すべき
- 良い音楽にまい進するという点では楽団員が一致していなければならない
- 京響はスタッフが少ない厳しい状況の中、信じられないくらいのエネルギーで支えてくれている
- 社会の一員であることを意識し、市民に溶け込み、社会的な理解を得ること（再掲）
- 京響の演奏レベルは高い。常にレベル向上を目指すべき
- 芸術家としての誇りを持つこと。日常生活においても、基本的な常識やモラルを持ち、音楽以外の分野においても、様々な知識や興味関心を有すること。そこで初めて人間としての器の大きさを音楽表現の感性レベルの高さが養われる。市民の目線に立てる大人としての芸術家であり、演奏家の姿勢を大切にしたい
- 一人の音楽家として活動する面もある。個人の研鑽を積むことで各自がレベルアップすることは重要。京響に所属することを誇りに思える、京響愛をもって活動していける楽団員でありたい
- 責任と自覚、高い意識を持って日々、技術の向上から音楽的なことまで努力
- その時その時のコンサートを大事に。音楽に対するワクワクを持ち続ける
- 音楽家としてのモチベーションを高く維持することが不可欠
- 楽団員の個性が大切にされ、個人の雇用形態と将来に安定性が約束されることが重要
- 環境に甘んじて団員としての意識の低い者へは意識改革が必要
- 普段の生活、行いについても、京響楽団員として恥ずかしいことのないよう努めるべき
- 甘えを捨て、一丸となって経営意識を持つこと
- 全員が加盟必須の楽員会をつくるべき

<楽団員のあり方>

- 勤務時間で拘束して給料を支払われるアーティストであることに問題の根源があるのでは
- 外の活動が良い効果をもたらすこともある。バランスの取り方を検討する必要がある
- 公務員に準ずる雇用形態であるがゆえに、音楽家としての活動に矛盾が生じている
- 京響に所属する以上「京響第一」。京響が活動の最も大切な位置にあるスタンス
- 京響のスタープレイヤーをもっと外に出すべき
- 京響以外の演奏会に出演するなど、個人の技量を発揮できる場は大事である
- 楽器によって出勤日数や時間が異なるので歩合制を検討すべき
- 柔軟に活動を展開していくべき。降り番で自宅待機している楽員によるアンサンブル公演など

<コミュニケーション>

- 音楽そのものがコミュニケーション。争い・不満の基を抽出して良好なコミュニケーションを図れるかが重要。
- 皆で気持ちを合わせて進める体制をどうすれば作れるかが一番大事
- 健全な運営には、楽団員とスタッフ、事務局間の信頼関係を構築することが必要
- 互いに相手の立場を尊重し、社会的な情勢の変化にアンテナを向け、価値観が偏ることなく、課題解決に向けて協力しあうことが大切

<収支構造>

<体制>

- スタッフが人手不足。安定したスケジュールで自主公演と依頼演奏のバランスを取れるように
- 体制の柱となる音楽主幹のポストが長く空席である事は最大の問題
- 首席不在のセクションはいつまでもこの状態ではいけない

楽団員の想い

市民の想い

【京響の歩み】